

第3章 戦争遺跡等の活用の現状

第3章 戦争遺跡等の活用の現状

1 戦争遺跡を活用した平和学習・生涯学習の現状と課題

(1) 市立小・中学校アンケート調査結果

戦争遺跡を活用した本市の平和・学習拠点の形成に資するため、平成14年8月、市内の市立小・中学校における体験学習、平和学習に関する実態及び学習ニーズについてアンケート調査を実施した。

調査対象は、市内の小学校11校、中学校4校、合計15校、調査項目は(1)学校の概況、(2)平和教育、平和学習の取組の現状、(3)平和学習拠点の利用・活用の現状と意向などについて行った。調査方法は、館山市教育委員会を通じて、各校に配布し、11校全てから回答があった。

図表3-1 調査対象校

学校名		通学区域
第一中学校	船形小学校	船形、川名
	那古小学校	那古、正木、亀ヶ原、小原
第二中学校	館山小学校	館山、上真倉、下真倉、沼、宮城、笠名、大賀、富士見
	神余小学校	神余
	豊房小学校	東長田、西長田、大戸、出野尾、岡田、南条、飯沼、古茂口、作名、山萩、畑
	西岬小学校	香、塩見、浜田、早物、見物、加賀名、波左間、坂田、洲崎、西川名、伊戸、坂足、小沼、坂井
第三中学校	北条小学校	北条、新宿、長須賀、八幡、湊、高井、上野原、北条正木、下真倉のうち511～583番地、上真倉のうち1752～1755及び1759番地
	館野小学校	大網、安布里、山本、国分、稲、腰越、広瀬
	九重小学校	宝貝、水岡、安東、二子、藺、水玉、大井、竹原、江田
房南中学校	神戸小学校	大神宮、中里、竜岡、犬石、佐野、藤原、洲宮、茂名、布沼
	富崎小学校	布良、相浜、大神宮のうち220～307番地

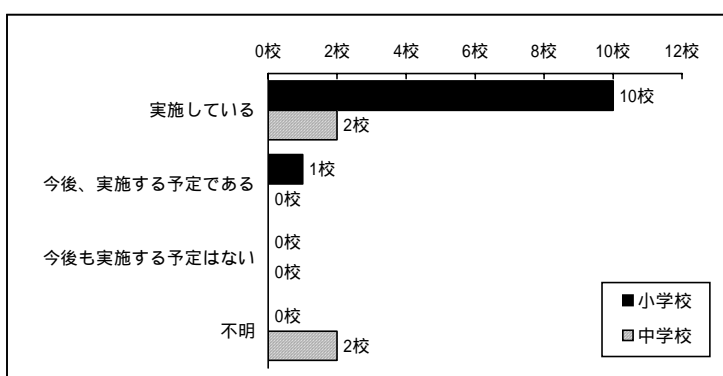
ア 平和学習の取組の現状

学習機会

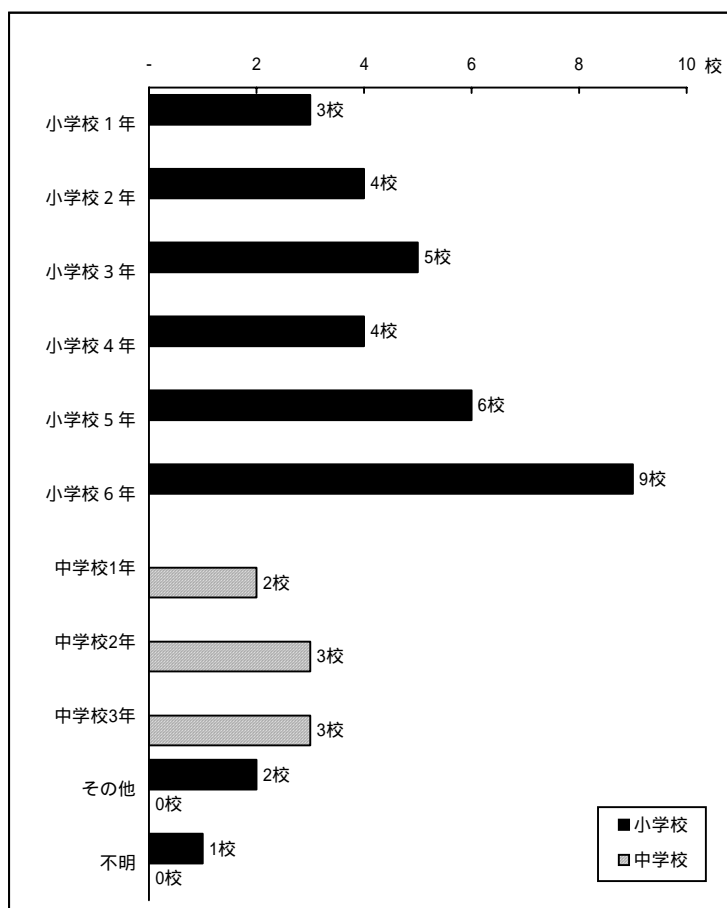
市内の小学校 11 校のうち、平和学習を実施している学校は 10 校、今後実施する予定がある学校は 1 校となっている。中学校 4 校については、実施が 2 校、不明が 2 校となっている。

平和学習の対象となる児童・生徒は、全ての学年にわたっている。学習機会は、ほとんどの小・中学校で、社会科などの必修科目の授業において実施されているが、小学校では、道徳教育、総合的な学習の時間においても実施されている。また、中学校では遠足・修学旅行の機会に実施しているところが 2 校あったが、課外授業として実施しているところはなかった。

図表3-2 平和学習の実施状況



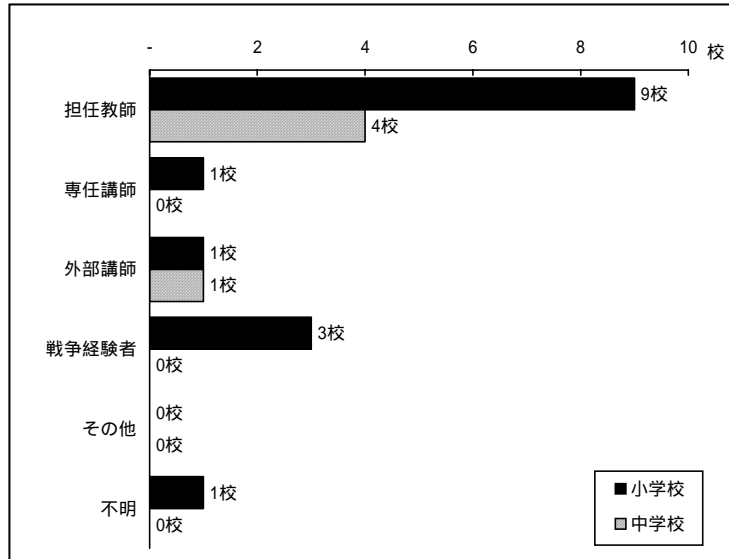
図表3-3 平和学習の対象となる児童・生徒の状況



学習指導者・方法・内容

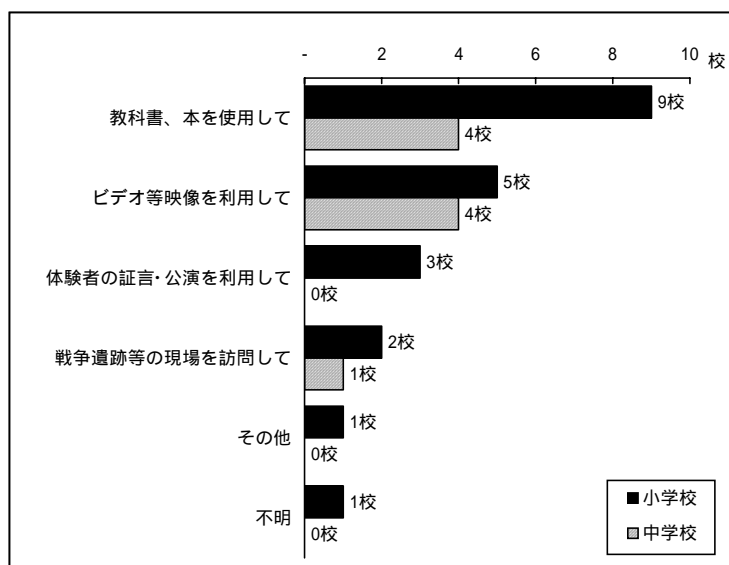
学習指導者は、必修科目の授業で実施しているところが多いため、担任教師をあげる学校が多かった。校外から、外部講師、戦争経験者を招聘する学校もみられたが、実施校は限られ、すべての小・中学校での実施とはなっていない。

図表3-4 平和学習の指導者



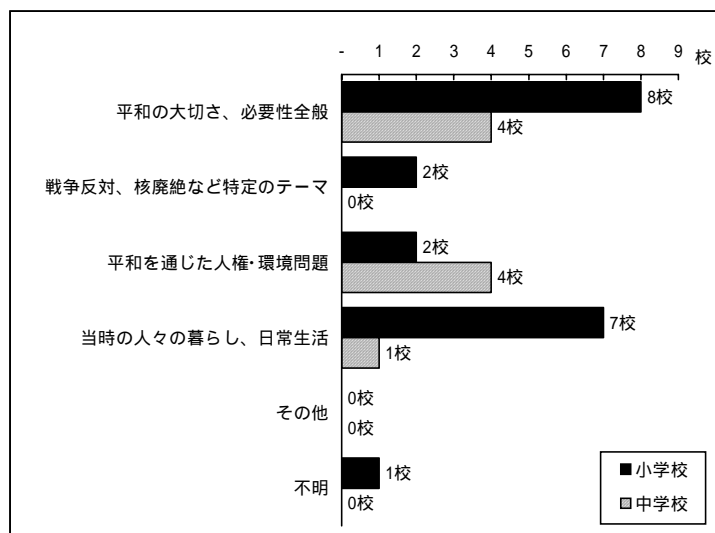
学習方法としては、教科書・副読本、書籍などの活字媒体、ビデオなどの映像媒体を教材とするところが多かった。体験者の証言・講演、戦争遺跡の訪問など、児童・生徒の直接体験を採用しているところもあるが、実施校は限定されている。

図表3-5 平和学習の方法



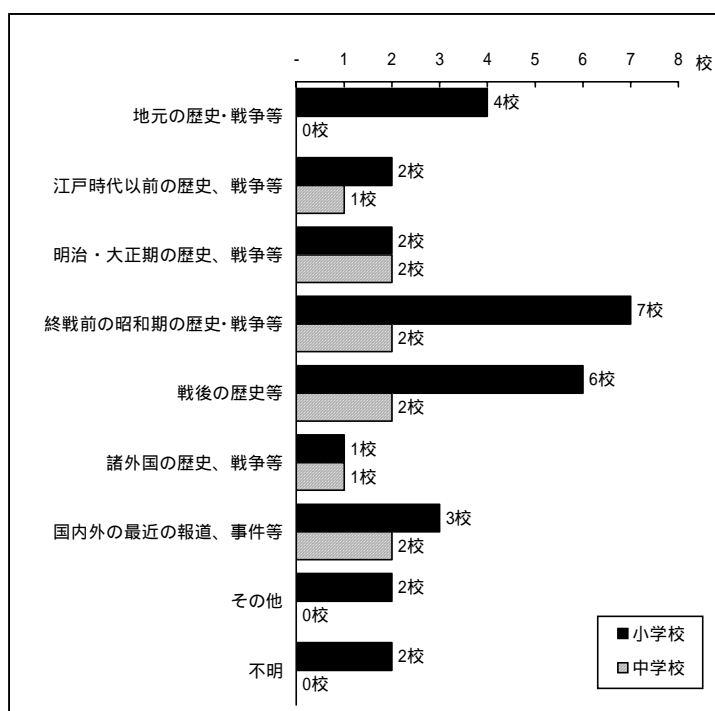
学習内容については、小学校の場合は「平和の大切さ・必要性」、「戦争当時の人々の暮らし・日常生活」をテーマにしている学校が多い。これに対して、中学校では、「平和を通じた人権・環境問題」と回答した学校が多くなっており、小学校よりも発達の・発展的な学習テーマを取り上げている現状がうかがわれる。

図表3-6 平和学習の内容



学習素材としては、戦前の昭和期、戦後の昭和・平成期を取り上げる学校が多くなっており、日中戦争、太平洋戦争などが素材として活用されている現状がうかがわれる。また、国内外の最近の報道、事件を取り上げる学校も比較的多くになっている。地元（館山市や周辺地区）の歴史・戦争の取り扱いについては、小学校の一部で行われているが、中学校で実施しているところはなかった。

図表3-7 平和学習の素材



イ 平和学習拠点の利用・活用について

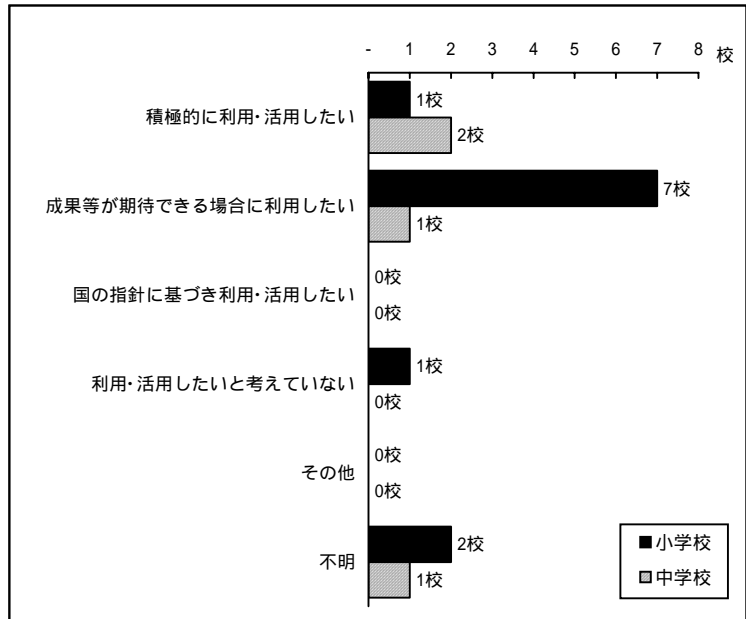
平和学習拠点の利用・活用について

では、ほとんどの学校において、利用・活用意向が認められるが、積極的な利用・活用と回答した学校は3校（小学校1、中学校2）に留まっている。最も回答が多かったのは、学習・教育上の成果が期待できる場合の8校（小学校7、中学校1）で、特に小学校でこうした意向が強い。

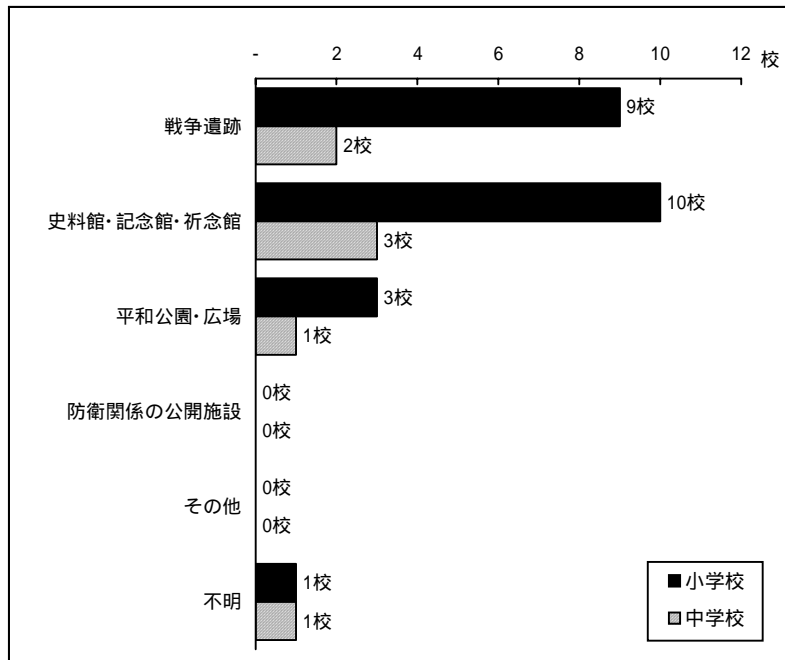
利用したい平和学習拠点としては、戦争関係資料・遺物を展示する施設（史料館・記念館等）の回答が多く（13校）、以下、戦争遺跡（11校）、平和公園・広場（4校）が続く。

戦争遺跡を平和学習拠点として整備する場合の配慮事項としては、ハード整備（研修室、レストラン、売店、駐車場）よりも、ソフト整備（教材作成、遺品・遺物展示、ガイド配置）を求める意向が強かった。また、安全性の確保をあげる学校も多くなっている。

図表3-8 平和学習拠点の利用・活用



図表3-9 利用したい平和学習拠点

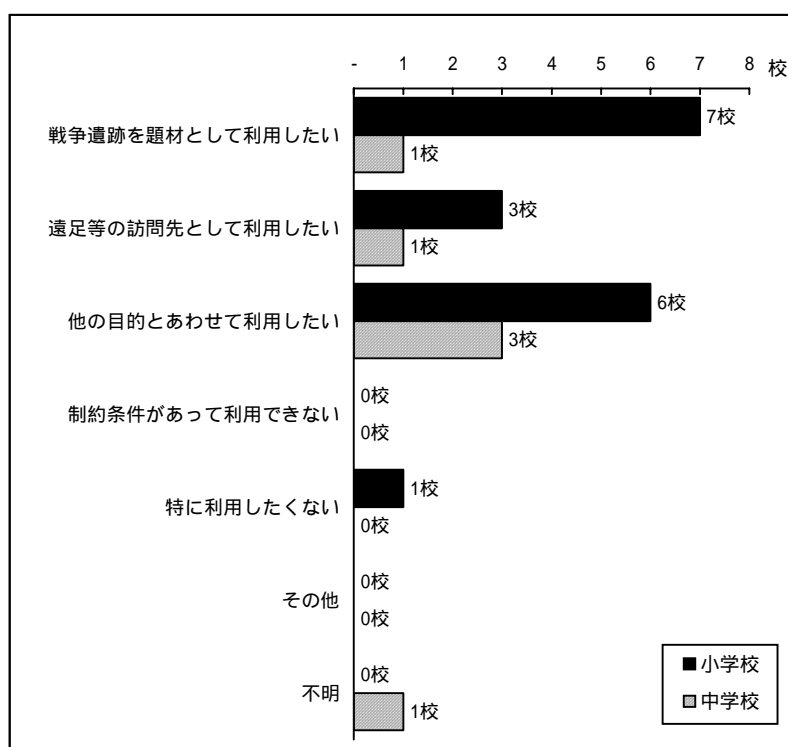


ウ 館山市における平和学習拠点の利用について

市内の戦争遺跡の平和学習としての利用・活用（見学等）については、「平和学習や戦争遺跡を題材とした見学・利用をしたい」と回答したところは8校（小学校7、中学校1）、「体験学習など他の目的とあわせて見学・利用をしたい」は9校（小学校6、中学校3）となっており、戦争遺跡の利用・活用意向は認められるものの、他の学習テーマと複合的に利用・活用する意向が強い（複数回答結果）。

課外授業・学校行事等において、平和学習と複合化させるメニューについては、自然体験（13校）創作体験（12校）をあげるところが多くなっている。

図表3-10 市内の戦争遺跡の利用



(2) 市内教育機関・施設ヒアリング調査結果

市内の学校教育における平和学習の取組について把握するため、学校教育課、市立房南中学校、館山市教育センター、中央公民館、市立博物館に対してヒアリング調査（平成14年8月）を行った。なお、収録に際しては、録音、書き取りにより記録した事項及び提供資料を基に事務局が原稿をまとめ、調査対象機関・施設担当者に内容確認を依頼した。

ア 市立中学校ヒアリング調査

学校教育における平和学習への具体的な取組を把握するため、市立房南中学校に対してヒアリング調査を実施した。

学校の概要

房南中学校は、生徒数120名（1年35、2年39、3年46）、教職員数19名（校長1、教頭1、教諭11、養護教諭1、副主査1、営繕手1、講師3、内社会科教諭2）。学区は漁業・宿泊業（民宿）が盛んな富崎地区と農業を中心とした神戸地区で、少子化の進行などにより、生徒数が減少傾向にある。

また、房南中学校は、館山海軍砲術学校跡地に建設されており、戦後、しばらく砲術学校校舎や演習用プールなどがそのまま使用されてきた歴史を有する。現在は、当時の校舎はとり壊れているが、演習用プール（通称軍人プール）、壕などの戦争遺跡が、学校周辺に多数残されている。

学習指導者について

教職員の平均年齢は42～43歳、戦争体験を有する者はなし。また、全員、戦後生まれ。教職員のうち、館山市在住者は半数程度。その他の者も大半は安房地域在住者。地域の歴史、地理などには一定の知識・情報は有しているが、詳細な歴史などについては把握していない場合も多い。学校が元館山海軍砲術学校跡に立地していることは、全教職員が周知しているが、詳細については知らない。

授業の中で生徒に何をどのように伝えるかは、学習指導要領を基本に各教諭が創意工夫、試行錯誤の中から方針や方法を決めている。平和学習については、教諭の世代、経験、知識などに差異があるため、各教諭がどのように取り組むかは、教諭の力量、考え方によって異なる。

平和学習・平和教育の取組について

本校における平和学習の機会については、社会科授業、選択教科授業、総合的な学習の時間、修学旅行・課外活動の4つある。

社会科授業では、生徒が平和学習に取り組む一般的な学習機会となっている。平和学習に必要な歴史・社会に係る体系的な知識を習得する場となっている。社会科は3年生が週2時間、1、2年生が週3時間の時数となっており、この中で、地理、歴史、公民を学習している。週5日制、ゆ

とりある学習の中で、社会科授業の時数も減ってきていることから、社会科の中で平和学習を大きく取り上げることには一定の制約がある。これまでの取組としては、昨年のアメリカのWTCビルのテロ事件の場合は、各学年ともに特別に学習機会を設けた。

選択科目は、発展的な学習機会を得る場として中学2～3年生が該当する。2コース14科目のうち、平和学習を取り組む場としては、社会科がある。

総合的な学習時間は、1～3年生が週3時数取り組んでいる。ふるさと学習用副読本「南総たてやま発見伝」も利用し、館山の歴史などを学習する機会となっている。中には房南中学校区の戦争を取り上げ、聞き取り調査を行っている生徒もいる。

修学旅行・課外授業については、1年生が日帰り体験学習（安房地域）、2年生が交流体験2日間（養護学校等との交流・福祉体験）、職場体験3日間、3年生が修学旅行3日間となっている。

修学旅行先は、他中学では日光・会津方面が多いが、本中学校では京都・奈良へ二泊三日旅行している。京都・奈良は歴史学習となる訪問先が多いが、平和学習先へは立ち寄っていない。広島・長崎などの平和学習拠点への立ち寄り、本市の小・中学生の場合は、修学旅行で訪問する機会はこれまではなかったと思われる。



1、2 階吹き抜け形式の図書室。収蔵図書は5千冊。授業の教室としても利用されている。



社会科図書の一部。千葉県の歴史関係書籍がある。



平和学習図書の一部。ポーランド・アウシュビッツ収容所関係の書籍がある。

平和学習・平和教育の教材について

平和学習の教材としては、教科書、副読本、教諭作成の教材、図書室図書がある。

は、市教育委員会制作の「南総たてやま発見伝」(2巻)があり、総合的な学習の時間などで活用している。は、各教諭の任意で作成しているもので、プリント、冊子の形態で授業の中で活用している。社会科では安房社会科教育研究会が組織され、地域の歴史などを取り上げ、生徒に身近な社会科教材を作成している。図書室は、学習図書を5千冊収蔵しており、この中に歴史図書、平和図書がある。本校の関係書籍としては、アウシュビッツ関係図書、『千葉県の歴史』などの図書が収蔵されている。

今後の平和学習・平和教育の取組について

生徒の学び方も、教師が知識を教授する形態だけではなく、生徒自身が「学び方を学ぶ」方法を取り入れている。社会科、総合的な学習の時間では、グループ学習・討論を取り入れており、生徒が課題を設定し、グループで資料収集・聞き取り調査などを行い、授業で発表する。授業では、討議を通じて生徒が様々な考え方や意見を知り、必ずしも正解や結論が出なくてもかまわない。

平和学習としては、学習指導要領を基本に、憲法学習、社会科学習、総合的な学習の時間などで進めていくことになるが、指導者は、戦争についての事実、実態を示し、生徒自らが考える場を与えることが重要になってくる。

平和学習を考えるときには、学習目的(何のために学ぶのか)が重要になる。市内の戦争遺跡などを通じて平和学習をする場合も、「何のために行かせるのか」といった学習上の位置づけが重要になる。

戦争遺跡の活用については、ありのままに見せることが重要である。また、戦争遺跡の見学前に必ず学校での事前学習が必要となる。また、夏期休暇などでは生徒だけが見学する場合もあるため、地元での案内・解説が重要となる。

戦争経験者の体験談は生徒の理解を深めるために重要で、遺跡で説明・案内してもらうことも意義がある。

教材作りは、生徒の発達段階、発達課題によって異なるため、一概にどのようなものが適切かは決めることはできない。

イ 教育センター

館山市の平和学習・平和教育の取組について

館山市として統一的な平和学習についての方針・取組は行っていない。現状では、市内各校において個別に平和学習、反戦教育などの取組が行われている。

現在、全市的な取組としてはIT学習、ふるさと学習、地方自治学習、職場体験学習の4つが行われている。ふるさと学習では、教育問題研究委員会が設置され、小中8名の教諭がふるさと学習副読本「南総たてやま発見伝」(2巻)を刊行し、副読本として利用している。

指導者について

教職員の研修の場としては、公的な場としては 市の教員研修会、 県の教員研修会の 2 つがある。 は生徒指導など学級経営などに係わるものが中心で教科研修となっていない。 については教科研修を含む総合的なものとなっている。

また、任意の組織として、ふるさと学習の推進などを含めた教科研修を目的とした館山市教育研究会が発足し、活動している。こうした研究会に対して、戦争遺跡、平和教育についての情報が提供されれば、研究会がテーマとして取り上げることは可能だと思われる。

その他に、夏期休暇中に社会科宿泊研修が行われている。こうした際に、教師に実際の戦争遺跡を視察してもらうことも有効だと思う。

教諭だけで対応できない指導内容については、校外から講師を招聘している。現在では、子どもの生きる力の確保を目的に、高齢者などをお願いして世代間交流を行っている。戦争経験者を受け入れた平和教育の取組はこれまでは行っていないが、講師の情報などがあれば、取り上げる学校・教師ができることも考えられる。学習の形態としては、講演方式の場合、戦争の話など、興味や関心が薄い話題に、子どもたちが長時間の集中力を保つことが難しいため、授業の中で 10 分程度話をしてもらい、その後は教師や子どもと対話しながら進める形式が良いのではないか。また、フィールドワークの中で説明をしてもらえれば、生徒も関心をもって学習できる。

講師への謝礼などについては、1 校当たり年間 3 ～ 5 万円程度の予算しかなく、現在は交通費及び昼食代といったケースが多い。また、ボランティア保険などに加入して、講師の災害・事故などへ対応している。

平和学習拠点の形成について

安全性の確保は極めて重要である。また、子どものフィールドワークが簡単にできるような施設が利用しやすい。

利用に当たっては、手続き面の簡素化が必要。電話での予約など簡単に学校や子どもを受け入れてもらえる施設であればいい。また、見学内容、様子がホームページで閲覧できるなど、情報の公開も必要ではないか。

入場料・利用料については、実費の負担程度で原則的には無料にしてもらえるとよい。課外活動の際、施設に対して学校側でまとめて利用料を支払う場合でも、保護者には利用料などの実費を請求している。保護者に過重な負担をかけるとともに、請求事務に係る教職員の負担も大きい。

掲示板、リーフレット、ガイドなどについては、小学生でも理解できるものが好ましい。「南総たてやま発見伝」では、小学 3 年生以上を対象に漢字にルビを振った記述をしている。一般的には小学校 5 年生の新出漢字を採用するのが適切ではないか。

戦争遺跡の見学で必要になる教材は、 マップ、 遺跡・展示等の説明文。これらがリーフレット、ガイドなどに含まれることが望ましい。学習内容としては、個別のテーマから普遍的なテーマへと広がり、課題を与えたり、問題提起できるものがよい。

見学時間は、小学生の場合、送迎時間も含め、2時間程度が一般的。この場合、1か所では時間の消化が難しく、数箇所のコース設定が必要である。

今後の平和学習・平和教育の取組について

平和学習に対する子どもの関心を高めるためには、学習のきっかけづくりが必要である。例えば、通学路の近辺に戦争遺跡がある場合は、案内板などを設置して、子どもの目に触れる情報を提供することなどが必要である。

「沖ノ島体験隊」のようなオリエンテーション型の学習も効果があるのではないか。例えば戦争遺跡を回りながら、学習していくことなどは可能ではないか。

学校週五日制になったため、市立博物館、地区公民館などの社会教育施設の活用を図り、子どもたちの平和学習の拠点にすべきではないか。

沖ノ島探検隊：海辺の自然とのふれあい体験を通じた子どもたちの生きる力の育成と学校外活動の充実を図るため、館山市沖ノ島を拠点に、ふるさと館山の自然や歴史など様々な地域資源（宝物）を探索しながら地域を学ぶため、館山市教育委員会が実施した事業。

ウ 公民館の現状

概況

市内には中央公民館のほか、11の地区公民館がある。中央公民館は全市民を対象とした学習テーマを、地区公民館は地域住民を対象にした学習テーマを取り上げている。

開館時間は、中央公民館は午前9時～午後9時（第3日曜日休館）、地区公民館は午前9時～午後9時（第3日曜日休館）。

設備

中央公民館には、集会室、展示ホール、学習室（兼会議室）、創作室、和室などがある。稼働率は50%以上と高く、人気のある曜日・時間帯は予約が大変な場合もある。また、定期的にご利用しているサークルなどもある。

学習場所としては、中央公民館の他に、コミュニティセンター2階の北条地区学習等供用施設、3階の勤労青少年ホームにも学習室、集会室はあり、公民館と同様に利用できる。

地区公民館は、木造の老朽化している施設が多く、設備も部屋のみで、図書などの学習教材も必ずしも十分に整備されていない。地区公民館は学校と隣接している地域が多く、学校の余裕教室の活用なども考えられる。なお、今後の地区公民館のあり方については、市町村合併構想の中で検討の可能性もある。

エ 公民館における学習活動について

利用者

年間の公民館の利用者は延べ20万人であり、自主的な学習サークルは300団体以上ある。

図表3-11 公民館の利用状況

区分		中央公民館	地区公民館	計
講座・教室	開催数（回）	50	135	185
	延べ回数（回）	590	481	771
	延べ参加者数（人）	11,129	7,586	18,715
サークル数		150	98	248
利用者数（人）		142,888	70,181	213,069

（注）中央公民館の利用者数は、コミュニティセンター全体（学習等供用施設・保健センター、勤労青少年ホームを含む）の利用者

資料：館山市中央公民館「視察資料」（平成13年）

学習内容

現在、中央公民館では、趣味的な講座は学習サークルにまかせ、現代的な課題を自主事業として取り上げることに主眼を置いている。現代的な課題とは、「ペイオフ問題」といった市民生活に直結したものが多く、「平和」、「戦争」といった大きなテーマを取り上げることは少ない。

主要な公民館主催事業としては、ふるさと講座、教養講座、家庭教育講座の3つがある。

は人材養成講座で、50代以上の人の参加が多い。聴講するだけの基礎コースは100人位が参加している。自主学習に取り組む専門コースでは、1講座当たり5～10人の参加者で、座学2/3、フィールド1/3の学習形態となっている。講師は地元の学識者、行政関係者となっている。

は生活環境問題、法律問題などを取り上げている。

は親子で参加できる学習機会となっており、キャンプなどアウトドア型のイベントも実施している。過去に大房などを利用したことがある。

地区公民館活動は、伝承遊び、ゲームなどを通じて異年齢交流が行われている。こうした場を通じて、戦争当時の話が子どもに語られている場合もある。

館山地区公民館では、「戦跡フィールドワーク」を実施し、平和学習を進めている。

市民グループの自主事業として、毎年「安房反核フェスティバル」が開催されている。本年は7月に開催され、3日間で1,000人程度の来客があった。絵画や写真の展示、映画の上映、当時の料理(すいとん)体験などが行われていた。若い人も参加しているが、60～70代の人々がメインとなっている。

オ 今後の平和学習・平和教育について

平和学習の目的を明確に示すことが必要である。現在、公民館で行われているふるさと講座などで行われている歴史系の講座は、高齢者が中心で館山市や自分自身のルーツを調査したりすることに人気があり、平和学習の視点からの戦争遺跡を見て回ることには、高齢者には、ピンとこないのではないかと。また、若い人に対しては、未来志向型の学習内容でないと人気がでない。

平和学習の取組の中で、学校週五日制などに対応した学社融合の取組がこれから重要になる。現状では、学校教育と社会教育の担当者の情報の共有や話し合いが十分に図られていない。現在、関係者の協議の場はあるが、今後は定期的な会合の開催など、話し合いを深める必要がある。

平和学習の切り口は、戦争遺跡以外にも身近に沢山ある。例えば、太平洋戦争だけではなく高齢者の関心の高い古戦場の歴史を取り上げるとか、国際交流事業の中から戦争経験のある若い世代の外国人講師を見つけてくるなどの方法もある。

学校や地区公民館が独自のネットワークを有しており、これらの活用が効果的なのではないか。例えば、地区公民館運営審議会には地元の教育関係者が参加している。

教育委員会、公民館には社会教育主事の配置がなく、講座などの企画力にも限界がある。IT講習などではこうした点を民間の協力によって補っている。平和教育の場合についても民間のNPO組織などを活用し、学習場所の確保、PRなどは行政が、学習内容の企画化は民間団体が担当する公民連携事業が可能ではないか。

公民館における学習活動では、受講生は、テキスト代など実費の負担のみでその他は原則無料となっている。市民に公平に学習機会を提供するため、県内の公民館統一の見解となっている。例えば、千葉市でも一定の受講料を徴収する講座は生涯学習センターが担っており、公民館の講座は

無料で実施している。平和学習を公民館で実施する場合は、こうした点に配慮してもらう必要がある。

平和学習に必要な人材バンクについては、生涯学習課の実施しているマイスクールボランティア制度があるが、さらにデータベースの充実が必要である。それには、全市的に講師への対応、データ更新方法、情報提供方法などをルール化していくことが必要である。

図表 3-12 平成 13 年度中央公民館講座事業計画

No.	課題テーマ	講座名	講座概要	対象	定員	期間	回数
1	環境保全 地域作り	選択型 ふるさと講座	ふるさと百科たてやま大事典制作の一環として、従来のふるさと講座の役割に加え、事典制作に関わる人材の育成を目指す。歴史・自然・生活を大分野として基礎コース・専門コースで構成し、地元の講師陣を中心に運営を図る。	一般	120	9～3月	13
2	地域作り	ふるさとジャーナリスト養成教室	たてやま大事典制作に必要な取材ボランティアを養成する。	一般	20	10～2月	5
3	少子高齢化 IT 国際理解 健康 男女共同	館山オープンカレッジ	昭和女子大と連携し講師陣とその内容の充実を図ると共に、市民生活に直結した課題をテーマに展開する。	一般	120	9～2月	11
4	地域づくり	花ガーデニング教室	まちづくりの柱の一つである花のまちづくりを推進するため、講習や実技、視察研修を行う。	一般	40	8～2月	11
5		パネルシアター教室	製作から演出まで学び想像力と社会性を身につける。	小学校 3年生 以上	20	8～8月	4
6	学校外活動	将棋教室(I・II)	将棋サークルの協力を得て、子どもから大人まで、将棋の指し方から対局を行う。	小学生 以上	30	5月～8月 9月～12月	10
7		親子クッキング教室	千葉県牛乳普及協会との共催事業で、牛乳・乳製品を使った料理講習会。	小学生 以上の 親子	20組	12月	1
8		たてやま パパママ子育て塾	地域の環境を生かした野外体験や伝承体験などを行い、豊かな原体験を重ねると共に、家族の絆強めるふれあい場とする	親子	20組	7～2月	11
9	家庭教育	家庭教育学級	幼稚園・小学校単位の学級開催 文化ホールでの共同学習会	保護者		5月～2月 2月	103 1
10		子育て支援講座 ハッピーママの会	1歳未満の第1子を持つ親を対象にした子育て支援講座。健康管理課との共同事業。子育て情報の交換と仲間作りの場とする	保護者	30組	4月～3月	24
11	日本画	俳句教室	短文誌である俳句とその句意を伝達する画を調和させ表現する「俳画」について講義や実技を通じて学ぶ。	一般	30	6月～11月	10
12		マイカー点検教室	千葉県自動車整備協会安房郡市支部との共催。自分の車は自分で点検できるよう講義や実技を通じて学ぶ。	一般	30	9月	1
13	共催事業	救命講習	安房郡市消防本部との共催。応急手当に関する知識と心肺蘇生法の技術を身につけ、万が一の時に備える。	一般	30	9月	1
14		サークル フェスティバル	学習成果の発表の場・機会の提供を行うことで、学んだ知識や技術を還元するため、展示やステージ発表を行う。	一般		3月2、3、4日	3
15	総合事業	成人式	成人に達した男女のために、その心身の健全な成長を願い、社会人としての自覚と認識を深めてもらうとともに、その門出を祝福し、将来の幸福を祈念する。	新成人	対象 619	1月第2日曜	1
16		新入学児童 つばき苗プレゼント	小学校の入学式で新入生に市の木であるつばきの苗を配布する。	小1	470	4月	1
17	勤労青少年 ホーム事業	男性のためのセンス アップ教室	スーツの着こなし方から、休日の外出時の服装の着こなし方からまでおしゃれの極意を学ぶ。	成人 男性	20	3月	2

カ 館山市立博物館の現状

博物館の概要について

当館の来訪者は、年間で4.7～4.8万人程度であり、うち、3分の2が観光客で占められている。団体客は城山へは行くが、博物館までは足を運ばない。年度の変わり目は、中学生、高校生も多い。

PRはホームページ、観光エージェントへのチラシ提供、雑誌の取材対応などがある。

作成資料は、展示案内(リーフレット)、展示会の図録、館報「ミュージアム発見伝」(年2回、4頁)がある。館報に戦争遺跡を紹介することは可能である。

博物館の自主事業として講座などを開催している。講師は当館の学芸員が当たり、当館での調査研究の成果を教授している。当館で調査研究以外のテーマを取り上げることは、館主催の講座の趣旨に合わないので、公民館などの役割と考える。

講座の一環として、フィールド調査に出ることもあり、文化財マップをエリア・テーマごとに22種類まで作成し、希望者に配布している。今後も増やしていく。

博物館の収蔵品について

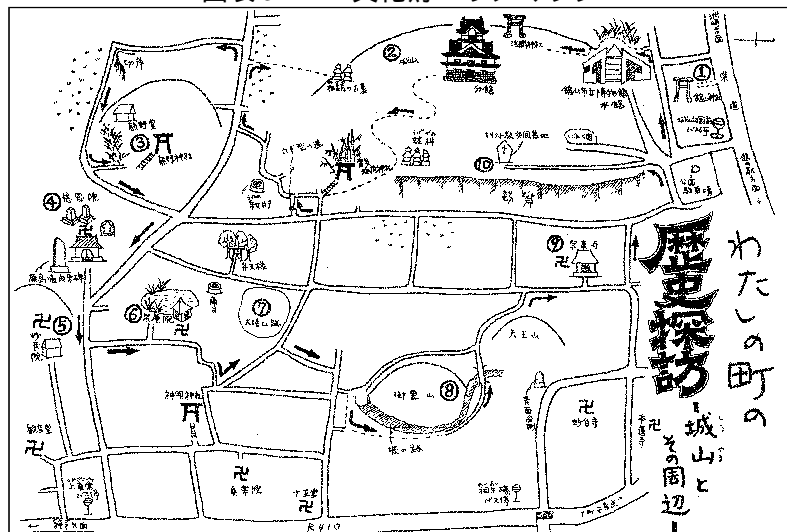
当館では、館山市を中心に安房地域の歴史・文化を対象とした調査研究・収集・展示をしており、戦後期も当然その対象として含まれる。ただし、関係資料の収集については、概ね電化される以前の家庭用品などとなっている。

軍事関係の収蔵品としては、軍装(軍服、軍帽、軍靴等)、軍関係品(バケツ、弾薬箱、コンクリート柱の破片、木製の銃の木型)など、約20～30点を所有している。こうした関係品のほとんどは、市民からの寄贈が中心で、本日も軍で使用したハンモックの寄贈があった。頻度としては年に数回程度で、頻繁に

図表3-13 博物館報



図表3-14 文化財エリアマップ



はない。

写真なども収蔵の対象となる。日中戦争以前は規制も厳しくなく、写真も相当残されている。日中戦争以降は、要塞地帯ということで写真は少なくなるが、当時も軍の許可があれば撮影は可能であったためまったく存在しないわけではない。航空隊の写真絵葉書は種類が豊富にあり、現在でも相当残っている。映像史料は収集されていない。

当館では、米軍が撮影した昭和22～24年当時の館山市域の航空写真を十数点所有している。著作権は国土地理院が有しており、著作物などへの使用には許可が必要となる。

証言、記憶など無形資料についても収集する必要がある。収集方法としては手記の収集や聞き取りがあるが、文章の場合はどうしてもニュアンスが変わるため、本人の肉声などを集めることも重要である。映像資料は、印象が強く、若い人の理解を助ける点で優れている。

戦争遺跡等の展示について

当館での戦争関係、平和関係の展示については、現在は行っていない。過去に「昔の暮らし」を紹介する中で展示した。また、戦後50年の平成7（1995）年に市民グループへ資料の貸し出しを行った。

当館の展示については、常設展示と企画展示があるが、常設展示は僅かな入れ替えはあるものの、基本的な展示資料は決まっており、明治以降の展示資料は少ない。企画展は年3回、長期休暇など入館者が多い時期（GW前後、7～8月、2～3月期）に実施している。

企画展は、3回のうちの1回は大規模な展示になる。資料の所在情報の収集など、事前調査は数年かけて行い、具体的な展示企画・準備は約1年かけて行う。企画展のテーマは、館山市立博物館であることから、地域の資料を収集することが重要になる。

常設展示については、ケース1個分の余裕スペースがあり、ここに明治時代以降の展示を行っていくことは可能。スペースは奥行き1.2m、幅10m程度だが、企画展開催時には使用するため、常

図表3-15 館山市立博物館の戦争関係の収蔵品



設展示は不可能である。

壕など戦争遺跡内での関係品の展示については、展示環境を把握する必要がある。絶対的な基準はないが、一般的には湿度60%前後、温度はあまり気にする必要はないが18～24℃がよいとされている。



新規の展示が可能なケース

2 歴史資源等の交流観光への活用の現状と計画

観光資源には「自然資源」と「人文資源」がある。

歴史資源は「人文資源」に位置づけられるが、太平洋戦争などの近代戦争遺跡を中心としつつ、その歴史を育んだ本市の地理的な立地条件や自然環境そのものを一連の資源として踏まえる問題意識から、ここでは「歴史資源等」とした。

(1) 歴史資源等の交流観光への活用の現況

先に観光特性で概観したように、本市には、単体として誘致力の大きな観光資源は少ない（「館山市観光振興基本計画」より）。その中で評価の高いものは社寺で「崖の観音」と地域景観で「房総の花畑」がともにBランク（地方レベルの誘致力資源）で、その他は県域レベルの誘致力をもつ鏡ヶ浦海岸、平砂浦、沖の島、洲崎である（館山市観光振興基本計画より）。ただ、これらの評価は「みる（サイトシーイング）」視点からの単体資源に対する評価である。

近年の国民観光需要の成熟化や体験志向の流れからすると、むしろ国定公園区域に指定されている豊かな自然環境をはじめ、ウミホテルや世界でも北限域にある珊瑚の生育、古代氏族忌部氏の氏族伝承（『古語拾遺』）にみられる四国阿波からの来住伝承と房総開拓神話や縄文時代の遺跡から出土する黒曜石に象徴される海を介在とした伊豆諸島や伊豆半島との交流史、戦国時代の里見氏の歴史や江戸時代の海上交通による交易史、南総里見八犬伝の舞台や周辺地域との縁、江戸幕府末期に築造された海岸警備の台場など、東京遷都以降の首都防衛の先端地域としての東京湾要塞、そして館山海軍航空隊などの設置、といった館山の立地に即した歴史の流れなどが注目される観光対象とあってよく、東京大都市圏に直結する臨海性の避寒地適性と相まって多彩な滞在型、体験型観光の場としてのポテンシャルをもつ。

事実、本市では、成熟化する観光ニーズに対応すべく体験学習や滞在プログラムによる魅力づくりと誘客が図られつつある。それは、本市の自然や歴史・文化をより深く楽しむためのもので、海の環境学習、海の体験学習、里山の環境学習、農業体験学習、酪農体験学習、ユニークな職場体験学習、歴史体感学習、創作活動、の8つのプログラムから構成されている。

この中の「歴史体感学習プログラム」で、「里見の歴史史跡探訪（里見氏をテーマとしている市立博物館、稲村城跡、里見家ゆかりの寺等）」、「館山の歴史体感（やぐら、鉦切洞穴等）」、「海岸地形観察（沼サング、鉦切洞穴等）」とともに、「太平洋戦争遺跡見学（赤山地下壕等）」が明確に位置づけられている。ただ、近代戦争遺跡の体系的な調査はまだ緒についた段階で、赤山地下壕の見学を中心に案内や解説なども高校教師など一部研究者や市民ボランティアが当たっているレベルで、まだ、戦争遺跡の正確な情報化をはじめ市民、関係者の十分な理解や盛り上がりがある段階ではない。

(2) 今後の計画

戦争遺跡への対応については、市の総合計画、観光基本計画において歴史資源の中に包含されて方向づけられているが、資源の詳細調査や保存・整備の計画はこれからである。